

部活動の楽しさと部活動加入率の関わり

－ 部活動の楽しさとは何か －

1 はじめに

高校時代はどの生徒も心身の著しい成長を遂げ、確固とした自我を確立しようとする時期である。好奇心旺盛で感受性豊かなこの年代で、様々な経験を積むことはその後の生活の大切な基礎となる。そのため、社会生活の秩序などを意識した教育活動を施すことは学校現場の重要な職務であり、様々な教育活動を通じて望ましい方向へ導き生徒の成長を手助けする責任がある。

その中で、部活動の果たす役割は重要であり、文化部・運動部の隔てなく、人間関係の構築や礼節の習得など、社会に通ずる人間性の育成に大きく貢献をしてきたことは言うまでもない。

これまで本県研究部でも運動部活動の役割について多くの研究がなされ、平成13、14年度の研究「週完全五日制における部活動の役割」では、保護者が期待する学校教育活動の重要な一つであることが改めて検証され、運動部活動が持つ教育的意義の普遍性が謳われた。

しかし、全国的な傾向として部活動加入率は低下傾向にあり、生徒の健全育成の面からもその改善が課題として挙げられることが多くなってきた。ところが山形県高体連の調査で、それまで低下を続けていた運動部活動の加入率が、平成12年度から向上に転じていることが示された。これは今年度まで継続して増加しており、全国的にみられる「部活動離れ」とは一線を画す喜ばしい結果が続いている。

このことを受け、山形県高体連研究部では平成15年度に、この加入率向上の要因を調査する目的で「生徒の運動部活動の取り組みに関する意識調査」を行った。その結果、「楽しいから」「楽しく部活動がしたい」など、「楽しさ」を感じ、また求めている生徒が多いという顕著な数値が現れ、山形県の加入率向上のキーワードは「楽しい」にあると結論付けた。

しかし、スポーツの究極の目標である「楽しい」の定義や概念は抽象的であり、具体的に明らかにすることができなかつたため、平成16年度ではさらにこの研究を深めることとし、抽象的に表現された「楽しさ」が明らかになれば、部活動指導の有用な指標にできると考え研究に至った。

2 研究の方法

(1) 質問紙によるアンケート調査（無記名方式）

質問に対し、「楽しさ」の感じ方を5段階で評価

(2) 調査対象 県内62校の2、3年生、各学年2クラスずつに調査依頼（依頼67校）

回答総数8,335名（内訳：運動部継続4,574名、運動部退部865名、運動部経験無し2,896名）

うち、運動部の経験のない者を除く5,439名の回答について調査

(3) 調査期間 平成16年10月～11月

3 仮説

部活動の加入率が高くなるには、新入生の加入率の高さは勿論だが、2、3年生が部活動をやめずに続けていくこと、つまり「継続率」が高くなければならない。15年度の山形県高体連研究部の調査から、山形県の高校生は部活動に「楽しさ」を感じている生徒が多く、その中でも部活動継続者にはその傾向が強く表れ、また強く求めている。そこで継続して部活動を続けている2、3年生の「楽しさ」を明らかにすることで部活動継続率の高さとの関連を導き出すことができるものと考えた。

4 調査の結果と考察

この研究では「楽しさ」を明らかにすることを目的としているため、「5：感じる」「4：やや感じる」「3. ふつう」「2. あまり感じない」「1. 感じない」のうち、「5：感じる」「4：やや感じる」の2つの回答を「楽しい」の回答として扱い、グラフに示した。

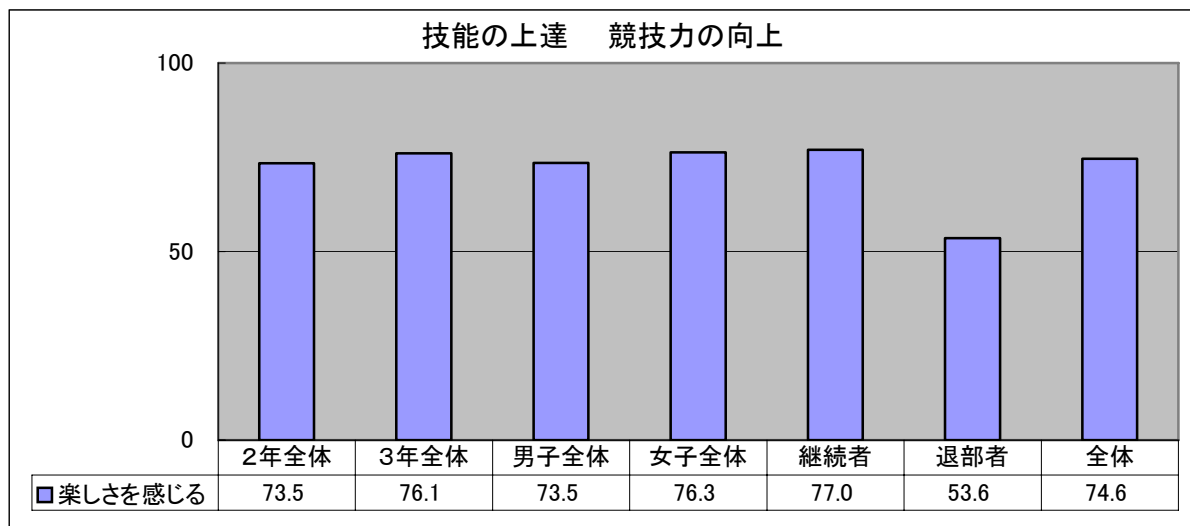
(1) 「全体の結果」

ほとんどの質問項目において、「楽しさ」を感じる割合は2年生より3年生が、退部者よりも継続者が高い。このことを考え合わせると、やはり「継続」と「楽しさ」は強く関係していると言えるのではないか。男子よりも女子が「楽しさ」を強く感じているが、このことについてはこのあとの考察でも触れるが、女子独自の楽しさの感じ方が関係していると考えられる。

(2) グループ別の結果

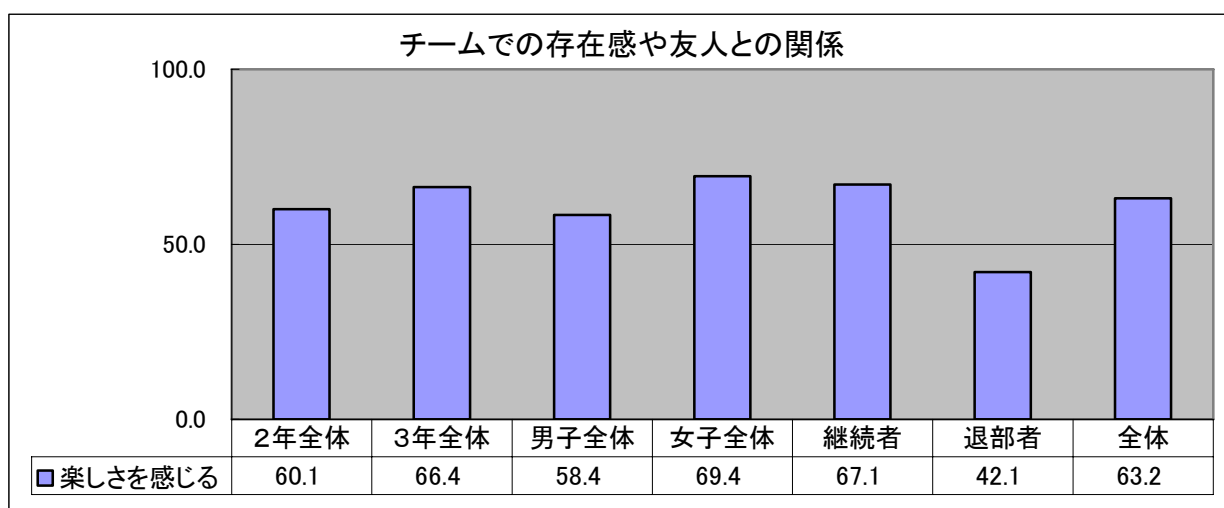
27の質問項目を以下の7つのグループに分け、データ集計した。

① 「技能の上達、競技力の向上」について



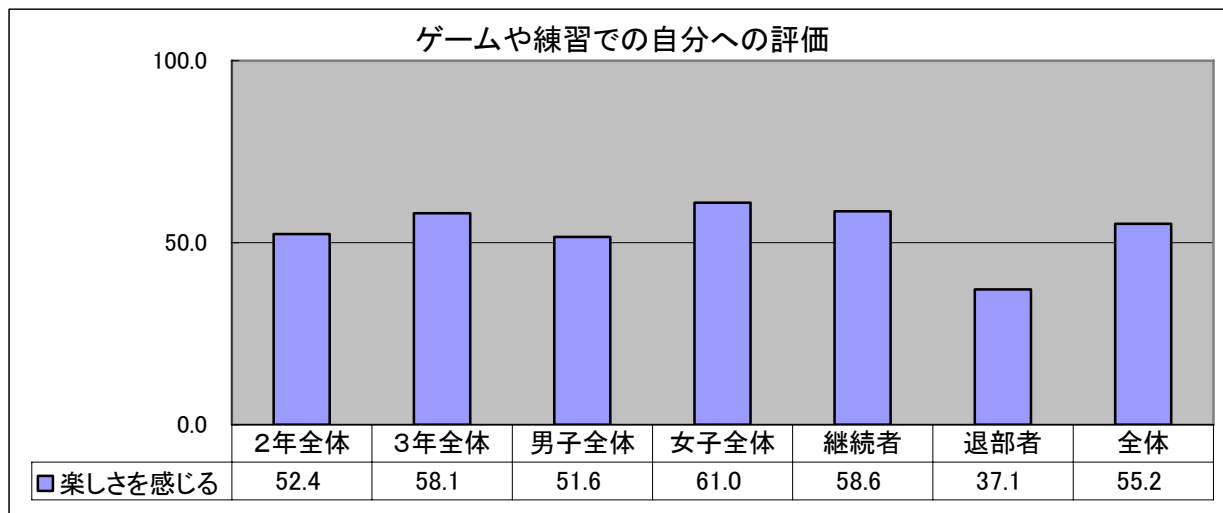
今回の調査の中で生徒が最も「楽しさ」を感じているのは、「技能の上達、競技力の向上」を実感できたときであることが分かった。特に「上達した、強くなったことが実感できたとき」、「ゲームに勝ったとき」については継続者の8割が楽しさを感じている。退部者は継続者に比べてその数値は低い。

② 「チームでの存在感や人間関係」について



このことに関する質問でも、継続者と退部者との間では「技能の上達、競技力の向上」と同様の傾向を見ることができる。退部者は「一体感」などの仲間意識を感じられずにいたことが覗える。また、男女間で大きな差を見ることができ、女子はチームへの一体感や友人関係を重視する傾向が見られる。

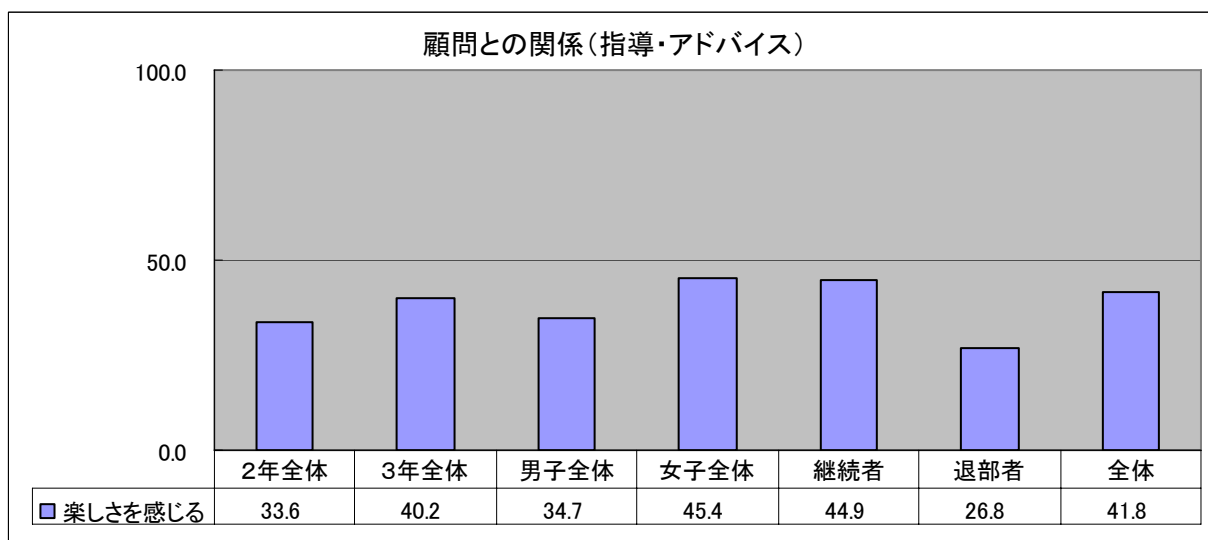
③ 「ゲームや練習での自分への評価」について



全体として褒められることで「楽しさ」を感じる傾向は強くないが、男子に比べ、女子は褒められることに「楽しさ」（喜び）を強く感じる傾向がある。女子は練習とゲームでの評価に対する反応に差はないが、男子はゲーム中とその結果に「楽しさ」を強く感じる傾向がある。

常に素直に評価を受け入れる女子に対して、男子は実際の結果でしか評価を受け入れない傾向があるようだ。顧問に自分の能力が認められたときには男女とも数値が低い。評価は顧問にされるより、友人やチームメイトからの評価を受け入れる傾向があるということだろうか。

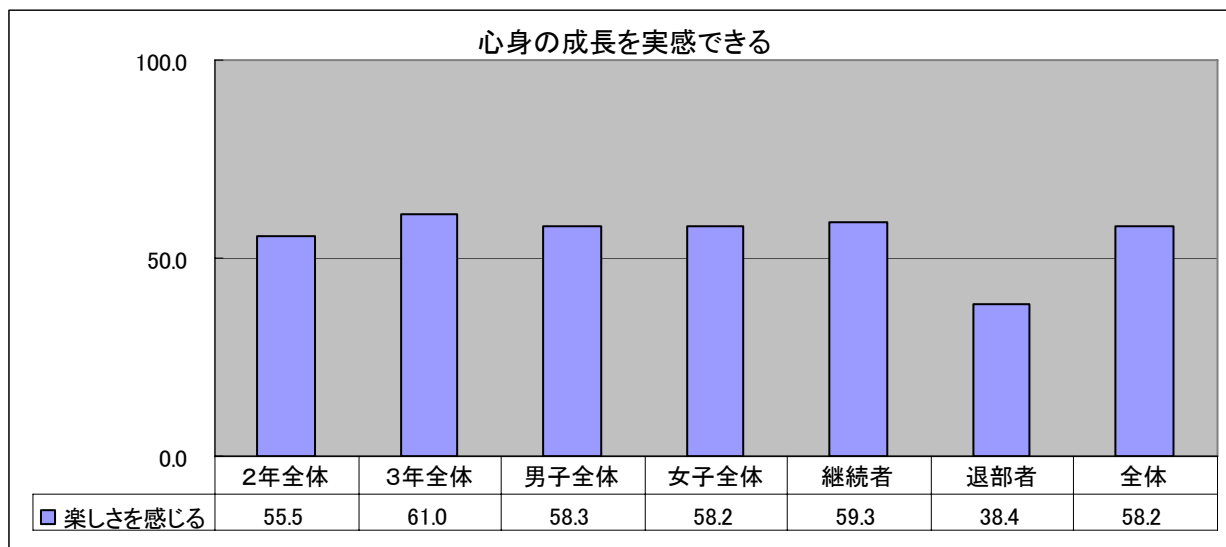
④ 「顧問との関係」について



生徒は顧問からの指導と、その関わりに対し「楽しさ」を感じている様子は見られない。基本的に顧問との関係が「指導する側」と「指導される側」になることから、楽しさを感じる対象にならず、このような結果になったのではないかと考えられる。

退部者の数値だけを見ると、継続者の比べて数値が極端に低い。このことは退部者と顧問の関係が好ましい状況ではなかったと言えよう。しかし、理解しやすく、やる気のある先生の指導に関する質問に対しては、「楽しさ」を感じている数値がやや高くなっており、充実した練習である場合によりその数値が高くなるようだ。

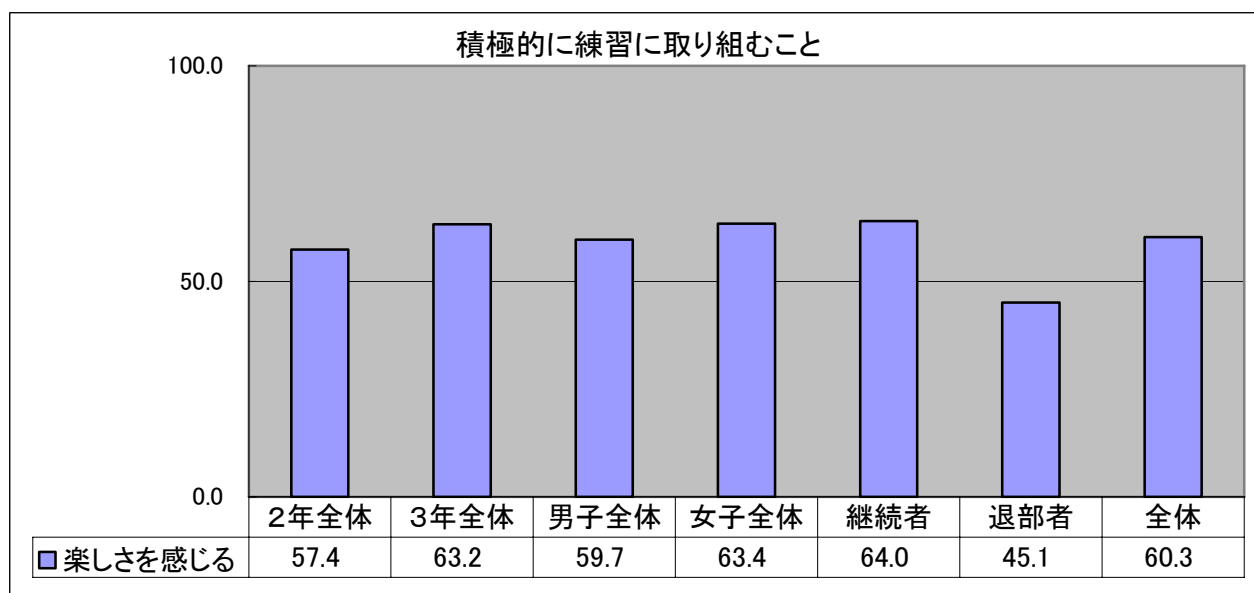
⑤ 「心身の成長」について



精神的な成長が楽しさに結びつくかを調べたが、「技能の上達、競技力の向上」と同様にその数値は高い。2年生よりも3年生がその傾向を強く持つことから、「継続」することは様々な面で充実感をもつことができ、そのことが「楽しい」に結びついているのではないだろうか。

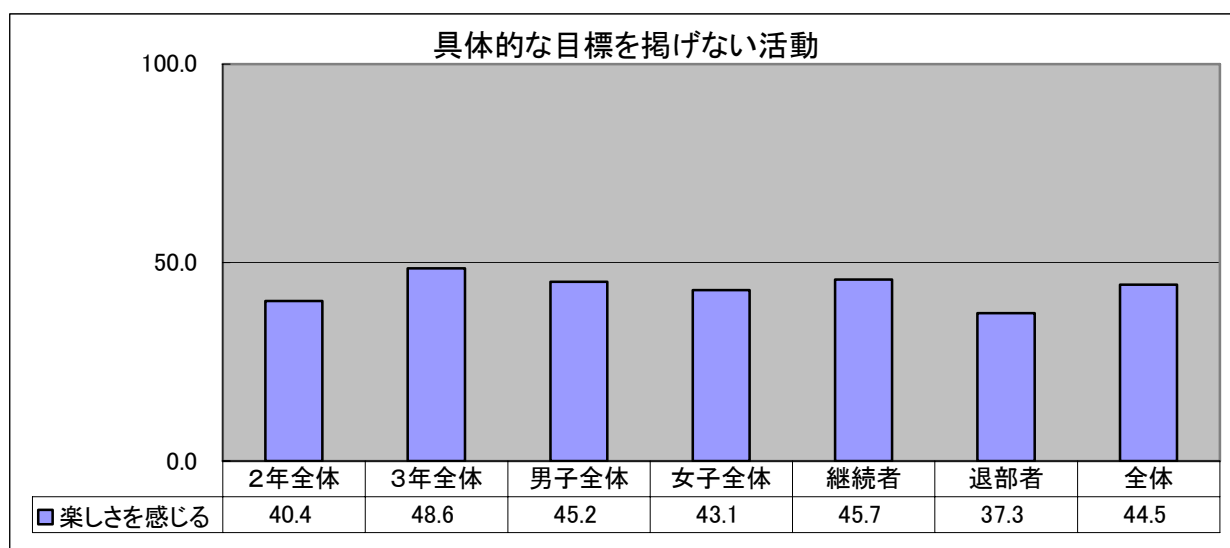
体を鍛えることに対する質問に、多くの男子が「楽しさ」（喜び）を感じている。競技力の向上を目指すために必要な項目であるためと考えられる。

⑥ 「練習への取り組み方」について



目標を持ち、達成感のある部活動ができたときにその数値は高まった。上達することに「楽しさ」を強く感じている生徒たちの部活動への要求度は高いといえる。目指そうとする目標が明確で、普段の部活動の内容がそれに沿ったものであるは、部活動を継続していく大きなポイントとは言えそうだ。

⑦「具体的な目標を掲げない活動など」について



「自由気ままな部活動ができる」に関しては「楽しさ」を感じる数値が低い。
 これは生徒が充実した部活動の内容を求めていることを裏付けていると考える。
 また「体を動かし、汗をかく」だけでも生徒の満足度は高くない。

5. まとめ

今回の研究のデータから、山形県の高校生は「技能の上達、競技力の向上」を強く意識し、このことに「楽しさ」を感じている。そしてそれを達成するためには日々の努力で達成感のある充実した部活動の実践が必要であることも認識している。このことは継続者、退部者共に「自由気ままな部活動」には楽しさを感じないことがデータとして表れたことから裏付けられた。

しかし、このことを達成する支えとして、間接的に様々な要素が関わっていることが改めて確認された。中でも一体感のある部活動の雰囲気や、苦しさや喜びを共にしながら自分を理解してくれる仲間の存在が一番に挙げられた。仲間意識の構築、疎外感の排除などは、既に指導者の常識として認識されている事項であるが、人間関係づくりが概して上手いとは言えない現代の高校生には、なお一層このことを意識して指導していかなければならないことが示された。特に女子生徒にはその傾向が強く現れており、部活動運営の重要なポイントとなりそうだ。

自己に対する評価については、女子の方が「褒められたい」という欲求を強く持っているようだ。一方、男子は客観的な結果が出ないと満足しない傾向があり、普段の努力への評価より実際の試合結果が何よりの楽しさ（喜び）であると言えそうだ。男女の指導方法について考慮すべき事項であろう。

顧問とのかかわりに関しては、残念ながら「楽しさ」を感じている生徒は非常に少なかった。このことは「指導する側」「指導される側」に分かれることから生じるものと考えられる。しかし、技能の上達、競技力の向上に楽しさを感じているということ、さらには友人関係にも良好な結果が現れたことは、部活動の運営が順調でなければ現れない結果であると考えられる。つまり「楽しさ」を感じることでできる部活動のためには、顧問の指導が深く関係していると予測され、顧問の指導力は数値以上に評価されてよいものと言えそうだ。

ただし、残念ながら顧問とのコミュニケーションの希薄さが伺える結果が出ていることからすれば、「俺について来い」的な指導から、それぞれの生徒の欲求や興味・関心・能力にあった指導内容や目標づくりを考えていく必要があるようだ。良好な雰囲気づくり、生徒の自主性の育成、生徒一人一人の理解などに努め、計画的で効率的な指導を行うことができれば、なお一層「楽しさ」が感じられる部活動の実践につながるものと考えられる。

よって、顧問と生徒の関係にやや不安要素を持つものの、山形県の部活動の加入率、継続率を向上させた「楽しさ」の要因は次のものであった。

- ① 技能の上達を感じることができるなど、活動の内容が適切であったこと
- ② やる気のある活動の雰囲気であったこと
- ③ 仲間との関係が良好であったこと
- ④ 精神的な成長を実感できる、自主性のある活動であったこと

以上の点が主な要因であるが、

「楽しい」と感じる活動には特別な要因があるわけではなく、日々の基本的な指導内容を充実させることがそれを支えている」と結論付けたい。

しかしながら、退部者が楽しさを感じる「傾向」は継続者とはほぼ同じであるが、その強さに差があることは見逃せない。特に一番楽しさを感じている「技能の上達・競技力の向上」には継続者との大きな差が生じている。また、「人間関係」の部分でも大きな差があることを考えると、これらについての「楽しさ不足」が退部へと導く大きな要因ではないかと推測する。

退部者個々には様々な退部理由があるのだろうが、彼らは「技能の上達の楽しさ」への実感が薄い。また「勝つ楽しさ」への実感も薄い。これは上達できていないなど、何らかの理由によりゲームへの参加が少ないためではないか。さらにこのことを理由に「自分は下手だ」「みんなから遅れをとっている」「どうせゲームに出られない」などの劣等感や疎外感を抱くこととなり、連鎖的に部活動に行けない状況になってしまうのではないだろうか。それぞれの生徒に合った指導内容、声かけ、レベル別に頑張れるゲームの設定などがあれば、「楽しさ」を感じさせることができ、退部を防げたのかもしれない。

我々指導者は常に指導方法に関して研鑽を重ね、全ての生徒が何らかの場面で「楽しさ」を感じられるように幅のある指導を行わなくてはならない。厳しい活動内容であっても目標や指導内容が充実していれば「楽しい」と感じられるなど、生徒は様々な場面で「楽しさ」を感じることができるのである。

「楽しさ」は全ての活動の原動力（やる気）となりうる。ひとつでも多く「楽しさ」が感じられる部活動をすることは、間違いなく生徒たちに充実感を与えることとなり、高校生活全般をも充実させてくれるに違いない。

スポーツ活動の場を学校から社会体育へという動き、また、勝利至上主義による様々な問題や教員の多忙化など諸問題を抱えている運動部活動は、昨今その是非が問われている。しかしながら、社会の情勢を踏まえても、なお、社会に通ずる人間性の育成など、部活動は重要な「教育活動」として社会からの期待は大きく、その役割が普遍であることは前記のとおりである。

今後も関係各位が協力し、この役割を担うことを自負し、より良い部活動の形を模索して生徒の健全育成に寄与していかなければならない。